

須坂の豪商田中本家の発展過程と江戸

A Study of Development of the Wealthy Tanaka Family
in Suzaka and Their Relationships with Edo
TANAKA Kazuhito and IWABUCHI Reiji

田中和仁・岩淵令治

はじめに

本共同研究では、三越の「伝統」を利用した商品開発のプロセスを分析するとともに、その商品の受容の様相についても検討を計画した。その事例として注目したのが、古文書のほか、三越をはじめ多数の調度品を良好な状態で伝存している北信濃の城下町須坂の豪商田中家であった。田中家は「豪商の館 田中本家博物館」として資料の保存・公開を行っており、同館からは全面的な協力を得て、調査、研究を実施することができた。

以下、この小文では田中家の発展過程を概観した上で（1 田中執筆）、三越との関係形成の前提として近世から近代初頭の田中本家と江戸・東京の関係（2 岩淵執筆）にかかわる史料として、田中家当主が明治2年に東京を訪れた際の日記と買物帳の概要を紹介したい。なお、「田中本家」は同地域において、田中家の本家筋の意味で同家の呼称として広く使われており、いわば屋号にあたる。また、他の学術論文においてもすでにこの呼称を用いることが一般化している。このため、以下、本稿でも同家を田中本家と表記することとしたい。

1 田中本家の発展過程と商い

北信濃屈指の豪商といわれた田中本家。現在は「豪商の館 田中本家博物館」として、江戸時代より代々伝えられてきた所蔵品と日本庭園を公開する博物館として運営されている。所蔵品は多岐にわたり、陶磁器、漆器、衣裳、書画、玩具、古文書など田中本家の生活とともに残された様々な品物が伝えられている。敷地は3000坪あり、その周囲は20個の土蔵で囲まれ、豪壮な建物が軒を連ねている。その内の5棟は、展示室として改装され常設展示と年間4回の企画展を開催し所蔵品を一般公開している。日本庭園は、江戸時代中期に造られた池泉回遊式庭園をはじめ、紅梅、白梅、しだれ桜、沙羅、紅葉など四季折々の花や植物を楽しむことができる。時代の移り変りをのり越え、現代にまで伝えられてきた田中本家の文化はどのように創られてきたのか、田中本家の創業から追ってみていきたい。

(1) 田中本家創業

田中本家の創業者である初代田中新八は元禄12年（1699）、須坂の仁礼村の百姓田中傳右衛門の

次男として生まれた。16歳のとき、当時須坂の豪商といわれた牧七郎右衛門家へ奉公にあがり、それから20年間、商人としての修行をつみ、享保18年(1733)、現在田中本家博物館があるこの土地の300坪ほどの家屋敷を買取り、独立して商売を始めた。

商売も順調に発展し、延享2年(1745)には須坂藩より御用金(藩の借入金)を命じられるまでになり、以後、代々明治維新の廃藩置県まで須坂藩の御用達として藩財政に尽くした。

商いとしては、その頃、盛んに栽培されていた菜種を集荷して、あかりに使われた種油を絞り江戸方面に出荷したり、煙草を集荷し江戸の煙草商に納めるなどしている。宝暦10年(1760)からは須坂藩が年貢として収納した米等を販売する穀問屋を始め、明和元年(1764)には酒造株を買い受け酒造業も始めた。財力が蓄えられるとともに家屋敷を拡げ、田畑(小作地)を増やし家業を2代目に譲った。

(2) 田中本家の基礎を築いた2代 新十郎信房

2代目の新十郎信房は、享保20年(1735)に新八の長男として生まれた。明和2年(1765)父新八の死去に伴い、家督を相続して新八郎を名乗り、安永5年に改名して新十郎と称した。これ以後、新十郎の名前は代々襲名され、大正時代まで続いた。

新十郎信房は新八を助け、家督を継いだ後もますます業績をのぼし、須坂藩から命じられた多額の御用金も幾度となく引き受け、また進んで水害地の復旧等を引き受けた。

これらの褒美として、袴などを再三にわたり拝領し、明和6年(1769)には苗字を名乗ることを許された。安永8年(1779)年には、種貸役格を命じられて二十人扶持の士分の待遇を受け、天明2年(1782)には代官格まで与えられた。現在も残る田中本家の池泉回遊式庭園は、天明7年に敷地を買い受け造られたものであり、須坂藩主も訪れるほどの日本庭園となった。

また、寛政6年(1794)には、田中本家の永続と発展を願って「家訓家定書」⁽²⁾を記し、寛政8年隠居し3代目へと家督を譲り渡した。

(3) 最盛期

3代新十郎信厚の頃、田中本家は最盛期をむかえた。寛政11年に須坂藩へ差し出した「商売御改ニ付奉書上候」⁽³⁾によると、当時の商売は、農業、酒造、油手絞り、ほか出店で質貸・小間物・穀物・煙草とされ、既に多角的な経営が行なわれていたことが窺われる。

この頃になると須坂藩御用達の席次も筆頭となり、多額の御用金を引き受けることになり、その貢献により、文化元年(1804)には士分の格を与えられている。文化6年には広間格として十人扶持を頂戴し、名前も左治馬信厚と武士の名に改めた。

また、貸し金の抵当として多くの田畑が質流れとなったため、小作地が増大し次第に大地主としての地位も固まっていった。文政3年(1820)から天保2年(1831)にかけては、江戸市中の日本橋など7ヶ所ほどの土地を買い、土地貸し、店貸し、貸屋経営を行っていた記録も残されている(第2章参照)。

ただ、順調にきた田中本家も文政6年に須坂藩より命じられた御用金を辞退したところから、藩との確執が生まれ、取つぶし寸前の窮地に立たされ、苦しい時代を過ごすことになる。

(4) 幕末 須坂藩を支え続けた田中本家

新十郎信厚の三男が4代目新十郎を襲名していたが、若くして病死してしまったため、四男の信秀が5代目を継ぐこととなった。有力者の口添えや多額の献上金などにより須坂藩との関係も徐々に回復し、再び御用達を命じられるようになっていった。

度々の御用金調達、献金等の功績により天保11年(1840)に士分扱いの広間格、天保12年には広間本席を命じられ、新たに七十石を与えられた。正式に士分となり、名前も主水信秀と侍名前を許された。

この頃の須坂藩は財政の疲弊が進み、これを立て直すため、弘化2年(1845)吉向行阿父子を招請して陶磁器を作製し地場産業の育成を試みたり、嘉永3年(1850)には石門心学者・石田小右衛門を招き財政の改革をはかっている。こうした須坂藩が招いた客人をもてなす事も田中本家の勤めだったようで、田中本家に伝わる客人台帳「諸客賄方控帳」には、客人の名前、料理、器等、当時の宴会の様子が記されている。

主水信秀は御元方などの藩の役職を経て、万延元年(1860)に物頭格へとすすみ百石二人扶持を与えられたが隠居を願い出て勤務を許された。しかし、文久元年(1861)に堀直虎が13代藩主になると藩政改革に先立ち江戸へ召し出され、江戸藩邸の財政を任された。取つぶし寸前の苦しい時代を経験したためか主水信秀は、最後まで須坂藩へ尽くし、明治3年に68歳で没している。

(5) 明治～大正時代

明治・大正時代の田中本家の経営については未だ調査が進んでおらずはっきりとしたことはわかっていないが、幕末維新の新たな時代の流れに苦しんだ時代であったことだろう。明治3年(1870)には「須坂騒動」と呼ばれる農民一揆に巻き込まれ、須坂城下の122棟の建物が焼失あるいはうち壊されたといわれている。田中本家は土蔵1ヵ所のみを残して居宅、土蔵、酒蔵、家財衣類道具はことごとく焼き払われ、長屋も破壊され、台風で壊れた長屋普請と合わせて、損害は7万両にのぼったといわれている⁽⁴⁾。

この時代の混乱期を過ごしたのが、明治元年生まれの田中佐賀であった。婿に7代目力之介を迎えるが病気ですぐに亡くなってしまい、女性であったが8代目当主を勤めている。

明治27年生まれの佐賀の長女田鶴も同様に、婿養子を迎えるが、夫を早くに病で亡くし10代目当主を勤めている。幕末から大正時代、田中本家は男子に恵まれず、また女性たちも新しい事業に取り組みなかったと想像される。当時、須坂の町は養蚕が盛んで製糸業によって多くの商人が栄えていたが、田中本家は製糸業には手を出してはいない。おそらくは須坂藩の頃から引き継いできた土地や貸長屋などの賃貸収入で生活していたのではないかと思われる。明治・大正時代に購入された着物、子供服、玩具など多く残されているが、新品同様の状態の良さで残されていることから、過度な贅沢は控え、ものを大切に扱い、慎ましやかな生活を送っていたことが窺える。

女性が当主を勤めるしかなかったこの時代は、田中本家として商売を発展させることができなかったが、佐賀と田鶴という2人の女性が先祖達の築いた財産を守り抜いてくれたおかげで、現在、田中本家博物館として公開できるほど様々な文物を残すことにつながったことは間違いなさだろう。

2 田中本家と江戸

(1) 田中本家と江戸

では、本報告書満園論文の近代の東京の百貨店からの購買を検討する前提として、近世から近代初頭にかけての田中本家の江戸・東京とのかかわりをみておきたい。

前章でみたように、18世紀後半以降、田中本家は領主堀家とのかかわりが強かった。堀家が幕閣をひんぱんに勤め、在府が多かったことから、田中本家も出府することがあったようである。たとえば、宝暦10年(1760)には、藩主嫡子の将軍への目見えの際に御用金150両を収め、翌年正月に目見えが済んだ際には祝儀で江戸に出府している⁽⁵⁾。

経営上の江戸との関係は不詳であるが、赤松聡子氏が明らかにされたように、18世紀に中心部の日本橋地域・内神田に町屋敷7ヶ所(沽券高で10860両)を取得し、町屋敷経営を行っていた⁽⁶⁾。経営にあたっては、家守とは別に、近江屋(小林)藤右衛門にとりまとめの代理人(沽券代)を任せていた。この近江屋は、「きん藤」と呼ばれる有力な塗物問屋⁽⁷⁾で、田中本家が取得した地面の1つである通二丁目の地借であった。赤松氏の分析によれば、年間で純利益は約300両であったが、江戸での支出を差し引いた結果、赤字になっていることを明らかにしている。そして、出費の大半が日本橋の別の場所3ヶ所の借地代にあてられ、また江戸に居住する親類の生活費、幕末の横浜への人參売買計画のための現地見学などにあてられていることから、江戸で何らかの商売をしていたと推測しているが、今回の調査でも具体的には検証はできなかった。このほか、本共同研究との関係では、「羽織・帯・傘・書籍など」江戸における「田中家個人の消費にあてられた買物」が「高額ではないが(中略)毎月となつて」おり、その代金にもあてられたと指摘が目されるが、残念ながら典拠が示されておらず、確認できない。

ちなみに、天保11年(1840)3月より5月の手代山崎喜助⁽⁸⁾の江戸への道中及び滞在中の記録「往来道中日記止宿中出入共」の「金銀出入覚」によれば、丸角屋金七に金2分3朱(23日)、大丸屋に「品々買物代之内渡」として金5両(23日)、房州屋新助へ金1分1朱(26日)、丸彦に金3朱(4月3日)、糸店に金2朱(4月3日 羽織代)、「通町にて」金1朱(同、「てうちん柄代」)、「上野行品々 小夫頼代」として銭100文、「角力見物」で金3両2朱・銭166文(4月4日)、伊勢源に金1分2朱(4月5日 昼飯并酒肴代)、有名な鰻店である尾張町大和田に金3朱(同、鰻代)、「浅草見世」へ銭204文(4月6日)、乗物屋吉兵衛へ金6両(4月14日、注文籠代内渡)、山田屋孫兵衛へ金2朱(4月15日、壺玉代)、通町伊勢屋に銭340文(4月15日 蠟燭代)、向両国雪柳へ金1両1分2朱(4月19日、料理并舟賃等)、富山町指物屋に銭105文(4月21日 小箱一ヶ代新キ)を渡している。購入品のうち、何が国元に届けられたのかは不詳だが、大丸の購入品の一部は、「縮緬一反」(5月11日「大丸之品」「宿へ預ケ物」「兵右衛門内へ」)であった。

(2) 東京での行動と買物—「東京行手控」を読む—

では、近代初頭となるが、明治2年の2月11日より4月3日までの一族の信誠が東京滞在中の際の行動と買物について紹介しておきたい。信誠は2冊の「東京行手控」を作成している。両冊とも同題のため、今回の整理時に付与した小番号の1、2を付与して表記する⁽⁹⁾。

まず、表1は、滞在中の行動をまとめたものである。この東京行きの目的については明記されていない。東京にいた須坂藩の重臣浦野に「御先触」願い（4月2日）を出して帰国しているが、浦野との接触も3回にすぎず、ほとんどは遊興と買い物に費やされている。到着から間もない2月13日に刀の注文に出かけ、後掲表3に示したように、刀を大量に修理・購入していることから、こちらが東京行きの目的の1つだった可能性が高い。

滞在のうち、3月7日より15日は鎌倉・江ノ島と横浜・神奈川・川崎大師、3月19日より26日は日光に出かけているが、そのほかは東京に宿泊した。宿泊先は神田の小柳二丁目伊勢屋伝次郎方であった。訪問先については、地域的には、3月16日以外、江戸の西側に出かけていないのが特徴である。複数回訪れているのは、浅草7回（2月16日、25日、26日芝居、28日、29日、3月18日三社祭、30日芝居、4月1日）、旅人や勤番武士の買い物で賑わう芝神明町や愛宕山・増上寺・芝口方面が5回（2月15日・22日・24日・30日、4月2日）、両国2回（2月18日、3月3日）、ほか吉原（3月30日～4月1日）、本所方面・北郊（2月28日）と深川方面（3月2日）の名所見物新名所の新島原（3月3日）・築地居留地（3月5日）の見物をしている。ほか飲食（両国亀清、芝酔月楼ほか）や買い物のほか、縁日・開帳（3月23日赤穂義士開帳・茅場町薬師、3月16日麴町山王）、寄席（2月20日小柳町、3月1日四日市）などを見物している。

行き先でとくに注目したいのが、旧江戸城吹上御庭の見物（2月23日）と「御城内極内拝見」（3月17日）で、前者では沽券代の近江屋藤右衛門（近藤）が、後者では須坂藩重臣の浦野清兵衛が案内している。近世段階でも前者への立ち入りは不可能ではなかったが、後者については正式には立ち入りはできなかった。天保期に出入商人の手代に紛れて大奥まで入ったという事例がある。後者は、幕末に須坂藩主が若年寄兼外国総奉行を務めて関係で、浦野はおそらく城内の構造を知っていた可能性が高いが、天皇の「東幸」（3月28日）を控えていたにもかかわらず、旧江戸城の警備体制が脆弱だった可能性をうかがわせる。また、天皇の2回目の「東幸」を実見している（「天子様拝見」）のも注目される。とくに感想は述べられていないが、彼らが尾張町の角に着いた時に「最早御先供御制罷成、漸之事拝見致し」とあることから、強い関心を抱いて見物していたことがうかがわれる。まだ「巡幸」によって各地で天皇が姿をあらわす前のこの時期に、江戸・東京の人間のみならず、他国の者も見物に加わっていたのである。記述を知り得ていないが、この時の見聞がどのように国元に伝わったのかも興味深い。前年とともにこの「東幸」は東京遷都の問題として重視されてきたが、他国の者の見聞とその情報の拡散も重要であろう。

行動にあたっては、沽券代の近江屋藤右衛門（近藤）とその関係者ないし手代と思われる「近藤喜三郎」、そして浦野が案内をつとめている。浦野の案内は、さきほどの江戸城と須坂藩邸（亀戸屋敷の庭訪問（2月27日））である。一方で注目したいのは、案内のない行動や購買行動がみられる点である。この史料でも「信秀酉年出府帰り」（後掲表5 直近のことであれば文久元（1861）年）と5代当主の出府が記されているが、先述したように、田中本家は江戸との関係を近世段階から持っており、信誠も江戸について一定の知識があったと思われる。

そして、この東京行きの際には、到着後の2月12・13日に田中増蔵（親類か 木挽町）・近江屋藤右衛門（沽券代）・万屋清兵衛・信州屋金蔵・古筆了伸先生（古筆鑑定家古筆了信〈1863-1946年）か）・近藤・万藤・須原屋鉄治郎・久平・三拾軒堀千代吉に土産を渡し、2月22日に村田屋治兵衛

表1 明治2年の東京での買い物・見物・交友関係記事一覧（「東京行手控」2より作成）

日付	記事の概要
2/5	明六時少し前に出発、坂木宿泊→2/7 追分宿→2/8 高崎宿泊→2/9 深谷宿泊→2/10 大宮宿泊→
2/11	板橋宿で昼食、本石町四丁目嶋屋甚蔵着。近藤喜三郎殿案内で、小柳二丁目伊勢屋伝次郎へ引越
2/12	朝飯前に湯屋／朝食後、彦三郎が田中増蔵殿・近江屋藤右衛門・万屋清兵衛・信州屋金蔵へ土産を持参／近藤で昼食・帰宅
2/13	近藤と「乍見物買物出、通式丁目中徳方」へ「注文物渡し」／万藤へ「刀立之注文」、同所で昼食（吸物と鰻茶漬、肴刺）／古筆先生へ彦三郎が土産を届ける
2/14	古筆先生が来訪／近藤と「大丸」買物注文ニ参り、夕方帰り／伯父が来訪、
2/15	伯父案内で芝増上寺・神明見物、ついでに村治立ち寄り、昼食八官町の鰻店大金
2/16	回向院、浅草裏山で見世物見物、茶漬川柳
2/17	近藤来訪
2/18	大丸に鳥渡用事で行く／富沢町に廻ったところ北村経蔵に逢い、同道／両国亀清で芸者1人がきて一杯し・茶漬け食べる／東門跡で分かれ、夕方帰る／留守中に清蔵が来訪、藤井与市も土産持参で来訪
2/19	藤井与市来訪／古筆先生来訪、土産の栗落雁1箱渡す（食事の献立あり）
2/20	連れてきた藤八に、大両掛を持たせて国元に帰す／照降町宮川長次郎方より注文物到来／柳原通り、小柳町貞山講釈間、柳原で雁鍋
2/21	近藤の案内で、綱惣に行き、それから村治の隠宅へ行き／茶漬京橋竹葉でうなぎ茶漬けを食べる／万藤へ寄って帰る
2/22	朝食後、木挽町田中氏を訪問／伯父と芝酔月楼で茶漬（ほか料理献立あり）／芝日影町村治ほか同町で買い物／日本橋山田屋と申蕎麦屋で夕飯／夜見世見物
2/23	近藤案内で吹上御庭（＝旧江戸城）見物同道／鼈甲屋／通二丁目中村屋徳兵衛で無腰になり、半蔵御門より入り、竹橋御門より出る「名言言語ニ不堪事」「辻之茶屋是又殊之外見事也」／茶漬を万久で食べる
2/24	芝神明前田嶋屋七左衛門方で買物、／帰宅後、近藤の招待（献立あり）
2/25	近藤 明日芝居参り候ニ付、万事取斗を頼む／伯父が来て、浅草見物、昼飯浅草隈屋、浅草で伯父と別れる／夜、近藤と芝居の取り決め
2/26	近藤案内で三丁目芝居へ 茶屋三丁目梅村／夕飯金プラト云茶屋
2/27	近藤来訪、亀江（井）戸御屋敷へ／浦野安兵衛殿方へ参り、御庭拝見／神社見物／橋本の茶飯、入湯／船宿に申しつけて両国橋まで行く（献立あり）
2/28	近藤と浅草不動、向島、三囲稲荷、牛ノ御前、王子権現、梅若塚見物／小倉庵を訪ねるが休みで浅草の万屋で食べる。／神田神明（マ）参詣
2/29	近藤の招きで、一丁目芝居へ行き、浅草隅屋で夕飯（献立あり）
2/30	万藤の若者が来訪／今井谷御上邸見物、芝増上寺・愛宕山見物、ときわ橋門外のふた鍋で夕食、三拾間堀玉寿しに寄る
3/1	近藤来訪 髪結のついでに土産物を選ぶ／茶漬けなど食べる（献立あり）／四日市で花清の講釈を聞く
3/2	深川飯宅より、深川八幡、三十三間堂、洲崎弁天見物／福山という茶屋で茶漬／五百羅漢見物
3/3	新島原見物／茶漬両国 どんぶり／近藤より食事に招かれる（献立あり）
3/4	塩干へ行く 近藤を頼み、通二丁目芸者2人を連れて船で品川手前で遊ぶ
3/5	近藤親類助七の知人藤屋徳兵衛（出張会所裏に住居）の案内で築地の異人館・ホテル見物、唐人・ポルトガルの方へ見物／竹葉で茶漬／近藤と本町一丁目枳見やへ行き、御島出積の買物／自分だけで宮川で買物／近藤に夕食に招かれる
3/6	近藤と話、髪結
3/7	近藤と江ノ島・鎌倉見物 本門寺、新田の社見物、川崎ふじや泊
3/8	神奈川相模屋に宿をとり、船で横浜へ。弁吉（綿内村）の紹介状を持って太田町二丁目信濃屋伝兵衛（綿内町田組弁吉）訪問、案内頼む
3/9	信濃屋伝兵衛方で買い物、神奈川宿泊
3/10	平三郎を濱へ牛肉買に行かせる／戸塚の観音、藤沢遊行寺見物、江ノ島岩本院泊
3/11	鎌倉見物（八幡宮、建長寺）
3/12	鎌倉見物（円覚寺、由比ヶ浜ほか）、浦賀泊
3/13	相州走り水御台場見物、異人船灯明見物、横須賀誠（製）鉄所見学できず、狐船頼み綱打、神奈川泊
3/14	大風雨、神奈川泊
3/15	川崎大師をみて、東京に戻る
3/16	麴町山王見物
3/17	浦野清兵衛の誘いで、「御城内極内拝見」
3/18	江戸小柳町より出発 浅草三社祭見物、杉戸釘屋泊
3/19	小山泊→3/20 大澤宿泊→3/21～23日光泊、日光見物→3/24 宇都宮泊→3/25 間々田宿泊→3/26 関宿より船で江戸橋へ 近藤に寄り、小柳町泊
3/27	帰宅ノ買物
3/28	須原鉄太郎に寄り、尾張町角で「天子様拝見」／芝竹川町「会见物」／仙徳久平・須原と高輪光（泉カ）岳寺へ義士開帳見物／ハツ山より永代橋まで船／茅場町薬師参詣
3/29	増蔵来訪／出立前之買物・古筆先生への暇乞い／近藤、髪結、万藤に寄り／室町浮世小路大坂屋金兵衛で鰻茶漬／下谷池之端仲通り住吉屋でできる購入／古筆先生に寄るが不在
3/30	二丁目芝居を訪問／吉原金兵衛・大黒（三玉屋）へ行き、茶屋大門内信濃甚兵衛付
4/1	三玉屋より帰り、浅草遠州やへ寄／古筆先生へ暇乞い／荷詰め
4/2	喜三郎亀江（井）戸御屋敷へ遣わし、御先触を浦野清兵衛へ頼む／久平の案内で下谷西街本阿弥又之介を尋ねる／万藤に寄り、芝口へ買物／木挽町増蔵殿へ暇乞い／酔月楼に増蔵殿・近藤・万藤・須原屋鉄治郎・久平・三拾軒堀千代吉を招いて酒宴
4/3	東京出発、板橋深野屋泊→4/4 鴻巣宿泊→4/5 新町泊→4/6 坂本泊→4/7 田中宿泊→4/8 帰着

の隠宅を訪問、また帰国前に暇乞いや酒宴を催していることから、田中本家が江戸・東京でネットワークを築いていたことがあらためて確認できる。

また、表2には、「東京行手控」1の「諸店住居控」の項の18店を示した。おそらく、田中本家が重視した店と考えられる。本阿弥家（9～12）は、幕府の「御刀脇差目利所」をつとめた一族と推測され、このうち太郎左衛門は幕末の『太平武鑑』と名前が一致する。平十郎は本阿弥家の15代成重で、金肌拭い法を発案した近代研磨の創始者とされ、宮内省の刀の御用も勤めた⁽¹¹⁾。1・2・5も刀に関わる者であり、刀関係が目立っていることが指摘できよう。このうち、2村田屋治兵衛には2月21日に隠宅に招かれ、目貫を購入している（表1・3）。このほか、小問物類や文具の商人も目立つ。到着後と出国前に挨拶の対象となった須原屋鉄治郎は、16書物問屋金花堂須原屋佐助の店の者と思われる。こうした江戸での諸関係が、近世段階から田中本家に蓄積されていったと考えられる。

表2 「諸店住居控」（「東京行手控」1 網掛けは末梢を示す）

	居所	店	備考
1	銀座三丁目	万屋藤兵衛	(刀)
2	芝日影丁式丁目	村田屋治兵衛	
3	浅草茅町式丁目	大墨源助	★十組丸合組 筆墨硯問屋 大墨但馬大椽
4	青山百人町組屋敷	齊藤喜三郎	
5	小船丁式丁目	小松屋善兵衛	右仁貞宗刀之身所持之由
6	芝神明前瀬戸物屋	花菱屋	徳利・盃此店ニ而
7	山下御門通り	丸竹	大古着屋
8	横浜料理店	佐の茂	
9	住吉丁飾屋裏仮住居	本阿弥啓三郎	太郎左衛門事
10	源助横丁	本阿弥常蔵	
11	下谷辺青石横丁	本阿弥兼治郎	
12	御徒士町中丁青石丁	本阿弥平十郎 本阿弥又之助	
13	浅草中ノ丁本六軒丁戸田様表門前 足立忠治郎様屋敷内	麴地省三	右相尋候二者、浅草鳥越ニ而承り候得者相訳り可申事
14	通り四丁目	堀津長右衛門	※茶問屋二番組
15	本町表カシ	㊦	
16	堀津ノとなり	金花堂	★通四丁目須原屋佐助（金花堂）書物問屋 御書物紙 ほか
17	亀江（井）戸茶店	橋本	
18	本町老丁目	栢見屋三右衛門	■問屋 ※呉服問屋増見屋三右衛門

備考欄の※は「諸問屋名前帳」、★は『江戸買物独案内』（文政7年<1824>）による。

最後に、滞在中の購買行動についてみてみよう。表3・表4は、「東京行手控」1に記載された購入品を示した。とくに刀24品は別記されていたため表4に、それ以外の133品を表3にまとめた。表4は記載された順のまま示し、表3は記載順の番号を示した上で、店舗順に並べ替えている。表3は、原記載はおおまかに購入日順であるが、大丸からの購入品は「大丸_江注文之品」、宮川忠次郎の購入品は「宮川忠次郎_江注文之品」、ほか「唐物店_江」と項目を設けて別記していることから、この3店での購入がとくに多かったことがうかがえる。品目としては133件のおおよその内訳は、呉服(表3-1～22は大丸、ほか洋装89～108唐物屋ほか)、袋物(23～31は宮川)、装身具(36～39は近藤 111は宮川ほか)、紙・文具(40～42は須原屋、ほか59・71筆)、ほか小間物(53将棋の本須原屋ほか)、食品(51松魚節 にんべん、45ホルトカル油、54茶、56和三盆ほか)、履物(55・60ほか)、陶磁器(46・72・77ほか)となっている。

購入目的としては、133件中、「自分用」と明記されるのが14反物・21刀装具・23文具と60江戸で使用する雪駄である。また、名前が明記された土産が「おむつ分」(2・4の呉服、32～34の装身具)、自分自身(「信誠」4・12呉服)、「五八郎方へ」(12呉服)、「おさつ方へ」(13呉服)、「おかう分」(123)、「英太郎方へ遣ス分」(55雪駄)、「新へ遣ス分」(124雪駄)、「半左衛門方へ」(8紙)、「六衛(カ)方へ」(23紙)、「五八郎方_江」(26袋物)、「松枝為助方_江」(27袋物)、「大工増吉小児_江」(28袋物)、「源右衛門_江」(48十露盤)、「廣澤先生用筆」(59)となっている。さらに、6件がとくに「土産用」と記され、きせる(35男5本・女3本)、近藤からの漆器類(37～39)、そして大量購入のものとして大丸の風呂敷(18)、須原屋の錦絵(43)、芝神明の花菱屋よりの“瀬戸物”の箱入りの盃(46)、にんべんからの松魚節(51)、茶(54)があげられている。土産として購入されたもの以外は、田中本家の生活で使われたと考えられ、江戸での購入品が生活財として機能していたことが推測されよう。

表5は、土産の配布先の一覧である。配布先は計78ヶ所で、うち最後の19ヶ所(60～78)は店内の奉公人で項を分けて記されている。先の名前が明記されたもののほか、大丸で購入した風呂敷(表3-18)、花菱屋で購入した箱入りの「盃」(表3-46)、にんべんの松魚節(表3-51)、茶(表3-54)の配布先が確認できる。

本事例は、新名所(築地居留地、新島原)、江戸城の警備状況、天皇「東幸」の見物、購入品にみる近世以来の商品(呉服、袋物、きせる、紙、錦絵、瀬戸物、鯉節)と西洋的な商品(洋装、ホルトガル油)、食事(うなぎ・蕎麦とふた鍋・横浜の牛肉)など、明治2年という時期の東京の「観光」の実例を語る事例として興味深いものであるが、とくに本共同研究との関係では、田中本家が東京の百貨店と関係が成立する以前から、江戸と関係を持ち、江戸での購買品が須坂に届けられていた点が注目される。こうした購入先について、呉服についてはさきの天保11年の在府でもこの明治2年の東京行きでも三井越後屋ではなく大丸が主な購入先であった点や、小間物を買う特定の店(宮川忠次郎)があった点に注目したい。本共同研究とのかかわりでは、こうした関係を江戸・東京で築いていた田中本家に、どのようにして三越百貨店が参入していったのかが重要である。今後の検討課題としたい。

表3 東京での購入品一覧（「東京行手控」1より作成 網掛けは抹消を示す）

	品名	数量	代	但書ほか	店舗		『江戸買物独案内』 (1824年刊) ほか備考
1	斜子(織) 裾裏模様小袖	1ツ		八かけ 右地白斜子, 此方より遣ス也	大丸(注文の品)	大丸	
2	龍門裾裏模様小袖(おむつ分)	2ツ		同断 (=八かけ) 黒薄色	大丸(注文の品)	大丸	
3	古龍門裾裏模様小袖	1ツ		右古龍門色抜在合沓ツ 此方より遣ス, 尤裏裾新規求メ可申事	大丸(注文の品)	大丸	
4	糸織女帯地(おむつ分)	3筋			大丸(注文の品)	大丸	
	(おむつ分)	(1)	565 匁		大丸(注文の品)	大丸	
	(おひて分)	(1)	560 匁		大丸(注文の品)	大丸	
	(信誠義経袴分)	(1)	409 匁		大丸(注文の品)	大丸	
5	小児初着	1ツ		龍門藤色曙浜辺ニ羽衣模様雛形手本別ニ有之	大丸(注文の品)	大丸	
6	右之緋縮緬絞リカ上板メ之内下着	1ツ			大丸(注文の品)	大丸	
7	小児袖なし羽織上次	2ツ			大丸(注文の品)	大丸	
8	緋羅紗袖なし羽織	2ツ計リ		沓ツ半左衛門方へ	大丸(注文の品)	大丸	
9	南部縞(自分用)	1反	408 匁(金6兩2分2朱ト1匁5分)		大丸(注文の品)	大丸	
10	紋織御呂縮緬	1反		草地	大丸(注文の品)	大丸	
11	仙台平袴地	2反		内壺反横町	大丸(注文の品)	大丸	
12	薩摩カスリ	3反計リ			大丸(注文の品)	大丸	
	(信誠分)	(1)	200 匁	草地	大丸(注文の品)	大丸	
	(五八郎方へ)	(1)	179 匁	草地	大丸(注文の品)	大丸	
		(1)	167 匁	草地	大丸(注文の品)	大丸	
13	木綿縮	2反			大丸(注文の品)	大丸	
	(おさつ方へ)	1反			大丸(注文の品)	大丸	
	(おみやへ)	1反			大丸(注文の品)	大丸	
14	浴衣地	2反		沓反自分用	大丸(注文の品)	大丸	
15	手拭地				大丸(注文の品)	大丸	
16	半襟(上中)	10計リ			大丸(注文の品)	大丸	
17	小倉男帯地	4筋計リ			大丸(注文の品)	大丸	
18	更羅紗風呂敷(大)	30計リ		右は唐物店ヨリハ小金ニ而求メ候敷	大丸(注文の品)	大丸	
	更羅紗風呂敷(中)	80計リ			大丸(注文の品)	大丸	
	更羅紗風呂敷(小)	15計リ			大丸(注文の品)	大丸	
19	小供髪かけ(おせつ・おしう・おみち・ふく)	7筋計リ			大丸(注文の品)	大丸	
20	義経袴地	1反	409 匁	紅糸織	大丸(注文の品)	大丸	
21	嶋空目縞	1反	215 匁	自分割羽織分	大丸(注文の品)	大丸	
22	絹縮緬	1反	228 匁	おひて分単物用ル也	大丸(注文の品)	大丸	
23	紙挟	1ツ	190 匁(表裂175 匁, 裏裂此方より遣ス也, 縫手間15 匁)	小菊判上 自分用	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	宮川長次郎(江戸小網町一丁目てりふり町 御紙入・御たばこ入品々)
		1ツ		小杉判 六衛(カ)方へ	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	
24	小供巾着	1ツ		宅小児分	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	
25	小供巾着	1ツ		紋八ツ藤, 普願寺行	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	
26	小供巾着	1ツ		紋丸ニ釘抜, 五八郎方 _江	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	
27	小供巾着	1ツ		紋, 松枝為助方 _江	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	
28	小供巾着	1ツ		紋丸ニ横木香 大工増吉小児 _江	宮川忠次郎(注文の品)	照降町 宮川長次郎	

29	女数珠入	1ツ		よふしさし付	宮川忠次郎 (注文の品)	照降町 宮川長次郎	
30	蒔絵櫛(上中)	4枚	42匁		宮川忠次郎 (注文の品)	照降町 宮川長次郎	
31	唐更羅紗烟草入	3つ計り		縫入	宮川忠次郎 (注文の品)	照降町 宮川長次郎	
32	櫛笄之事(おむつ分)	1本		長7寸・巾4分・厚2分5リ			
33	前差并跡さし(おむつ分)	2本					
34	中さし(おむつ分)	1本		長6寸5分まで			
35	きせる			土産用			
	男	5本計り					
	女	3本計り					
36	掛子附女硯箱	1ツ			近藤	近藤	
37	台重	3ツ		土産用	近藤	近藤	
38	木地臘合口小重	2ツ		土産用	近藤	近藤	
39	春慶塗入子	2組		土産用	近藤	近藤	
40	短冊	50枚			金花堂	金花堂	須原屋佐助(日本橋通四丁目 書物問屋・雁皮紙所)
		上(20枚)			金花堂	金花堂	
		次(30枚)			金花堂	金花堂	
41	時代鏡草双紙			右初篇より大尾迄直段間合可申事	金花堂	金花堂	
42	ひきとふろう大かゝりの絵	2通			金花堂	金花堂	
43	にしき絵品々			土産用	金花堂	金花堂	
44	千代紙	50枚					
45	ホルトカル油	1升計り			いわし屋市左衛門店	いわし屋市左衛門	鯛屋市左衛門(本町三丁目 唐和薬種問屋・薬種問屋・十組 線香問屋)
46	瀬戸盃箱入 上下数々			土産用	芝神明前花菱屋	芝神明前花菱屋	
47	高宮縁	1反		中物 壱疋半	本町一丁目		
48	十露盤	1桁		源右衛門 _江			
49	女下駄	3足		※「四五足」を「三足」に書換			
		高駄(1足)					
		引(2足)					
50	八幡黒下駄緒	20足		八分より壱寸迄	浅草諏訪町若松屋安五郎方	若松屋安五郎	
		大	1足あたり9匁		浅草諏訪町若松屋安五郎方	若松屋安五郎	
		中	1足あたり5匁5分8厘		浅草諏訪町若松屋安五郎方	若松屋安五郎	
51	松魚節				イ伊勢屋	にんべん	伊勢屋伊兵衛(日本橋瀬戸物町 十組 浜吉組 鯉節・塩干肴問屋)
		中(10本入)	2袋		イ伊勢屋	にんべん	
		中(7本入)	3袋	※「貳袋」を「三袋」に書換	イ伊勢屋	にんべん	
		小(7本入)	2袋	※「三袋」を「貳袋」に書換	イ伊勢屋	にんべん	
52	徳利(上中)	7~8本			芝神明前花菱屋	芝神明前花菱屋	
53	将棋経 上下	2冊			金花堂ヨリ	金花堂	
54	煎茶 小半斤入箱	6箱					
		箱代30匁位の品	(3箱)				
		箱代20匁前後の品	(3箱)				
55	雪踏	1足		英太郎方へ遣ス分			
56	和三盆砂糖	1斤					
57	こよみ						
58	キヒトフ	1ざい		※婦脾湯(きひとう)カ	鯛屋ヨリ	いわしや	
59	細筆	2本	4匁(1本あたり2匁ツ)	二月十二日	神田通鍋町東文堂清造	東文堂清造	

59	廣澤先生用筆		1匁5分	此筆上			
	入松芝泉堂		1匁				
60	雪踏	1足	32匁5分	二月十一日、自分東京ニ 而用ル	本石町		
61	真鍮古手燭	1丁	1分(内200 文抜ケ)	二月十六日求			
62	古状入箱	2ツ	1分1朱(内 300文抜ケ)	二月十六日求			
63	八幡黒柄袋	2ツ	2朱ツ、		浅草諏訪町若松 屋 _方	若松屋安五郎	
64	肌着	1枚	3分3朱	二月十七日	通二丁目中屋徳 治郎 _方	中屋徳治郎	
65	赤銅龍彫縁頭	1組	(右二品65・ 66で)1兩	同(二月)廿日			
66	鉄地象眼入鞘(カ)	1ツ	(右二品65・ 66で)1兩	(二月)廿日、此品廣元 長及			
67	式重組壺	1組	7匁5分	(二月)廿日			
68	金襴裂		6匁	(二月)廿日、巾3寸5分	宮川長次郎	照降町宮川長次郎	
69	夜具蒲団	2ツ	5匁	二月廿日			
70	天芝菊	1鉢	300文	(二月)廿日			
71	細筆	2本			通り塩町 文寿堂	文寿堂	
72	蓋茶碗	3ツ	15匁	(二月)廿日			
73	刀	1本	12兩	(二月)廿一日	万藤(万屋藤兵衛)	万屋	
74	赤銅松魚ニ金無垢時鳥目貫	1組	5兩	(二月)廿一日	村田や隠宅より	村田屋治兵衛	
75	モヘルトンヒ	1ツ	3兩	士郎へ遣ス			
76	鉄瓶	1ツ	3分2朱	堀江へ	堀津	堀津	
77	キヤク勝手クワン	1口		二月廿一日	堀津 _方	堀津(通り四丁目 堀津長右衛門)	
78	小杉半 本国織紙挟(紅表 白茶金襴)	1ツ	3兩	(二月)廿二日	芝神明前田嶋屋 七左衛門 _方	芝神明前田嶋屋 七左衛門 _方	
79	半紙判白茶唐更紗星縫紙挟 (紅表紺緞子付)	1ツ	2兩	(二月)廿二日			
80	羽織紐(青鼠ニ紫)	2口	30匁	(二月)廿二日			
81	茶入	1ツ	1朱	(二月)廿二日			
82	匳茶碗	5ツ	300文	(二月)廿二日			
83	かま	1ツ	2分	(二月)廿四日			
84	青貝書棚	1ツ	1兩2分	(二月)廿五日			
85	筆立		2分	二月廿五日			
86	盃洗		1分3朱	(二月)廿五日			
87	なわ	2兩目	15匁	(二月)卅日	鯛屋	いわしや	
88	銭入(上)	1ツ	1分3朱	三月一日	江戸橋柳た屋清七	柳た屋清七	
89	黒羅紗丸羽織	1ツ		裏黒五日市、此方より持 参なし	唐物店 _江		
90	黒羅紗割羽織(上・次)	2ツ		右三ツ之内黒羅紗裏、此 方より持参	唐物店 _江		
91	黒羅紗レキシユン	1ツ		紋丸ニ釘貫、火事羽織 形衿金銅	唐物店 _江		
92	黒羅紗スツホウ	2ツ	5兩1分	※「三ツカ五ツ」を「式ツ」 に書換	唐物店 _江		
93	黒羅紗頭巾	1ツ	1兩2分	雛形近藤 _江 送り置	近藤 唐物店 _江	近藤	
94	黒羅紗もゝ引	1足			唐物店 _江		
95	古タンブクロ			見当り之節相求メ可申事	唐物店 _江		
96	懐中時計之事				唐物店 _江		
97	鉄砲之事				唐物店 _江		
98	革糧運(上)	2ツ	上中共代金 ニ而フ○		唐物店 _江		
99	象皮帯取(上)	1筋	金ノハ○		唐物店 _江		
100	象皮腰メ(上)	1筋			唐物店 _江		
101	バツチリ	1筋			唐物店 _江		
102	姿見(大中5枚斗り)			内、大之巻杖、外九寸ニ 巻尺三寸位ニ而宜敷	唐物店 _江		
103	モヘル				唐物店 _江		

104	黒羅紗レキシユン(御馬出様御注文)				火事羽織形襟紺地金銅紋藤の丸	唐物店江		
105	上々フランネルツ、ボウ(御馬出様御注文)				色紫カ緋之内	唐物店江		
106	黒羅紗ツ、ボウ(御馬出様御注文)					唐物店江		
107	黒羅紗ダンブ(御馬出様御注文)					唐物店江		
108	黒モヘルチヨツキ(御馬出様御注文)	1枚				唐物店江		
109	打敷	1枚	1分2匁	三月一日		江戸橋(江戸ばし)柳多や 唐物店江	柳た屋清七	
110	珊瑚根掛		20両1分かへ	(三月)三日		唐物店江		
111	梅蒔絵櫛	1枚	3分	(三月)三日 玉印分		宮川 唐物店江	照降町宮川長次郎	
112	中さし	1本	2分2朱	(三月)三日 玉印分		唐物店江		
113	着(き)物裾扶			(三月)三日		唐物店江		
114	手たし筒(カ)	1ツ	金ノ〇			唐物店江		
115	珠数	1連	1分3朱	三月廿七日		江戸横山町三丁目近江屋芳治郎 唐物店江	近江屋芳治郎	
116	手はさみ	1丁	7匁5分	三月廿七日		江戸通油町すみや七左衛門 唐物店江	すみや七左衛門	炭屋七左衛門(通油町十組打物間屋)
117	懐中剃刀		3匁	三月廿七日		江戸通油町すみや七左衛門 唐物店江	すみや七左衛門	
118	一角弁当箸	1膳	39匁	三月廿七日		浅草きじや 唐物店江	きじや	
119	大骨傘		2分1朱	三月廿七日		浅草 唐物店江		
120	高宮緑	4反	258匁(反63匁ニ当ル)	三月廿九日		日本橋通四丁目近江屋久右衛門 唐物店江	近江屋久右衛門	近江屋久右衛門(日本橋通四丁目豊表間屋)
121	紙張陸軍笠(金具共)	1ツ	1両	三月廿九日		唐物店江		
122	紫羽織ノ紐	1口	1分2匁	三月廿九日		いねや清兵衛 唐物店江	いねや清兵衛	
123	緋山まゆ入■		2分1朱	三月廿九日 おかう分		南伝馬町壹丁目更紗屋藤次郎 唐物店江	更紗屋藤次郎	
124	雪踏		26匁5分	三月廿九日 右、新へ遣ス分		唐物店江		
125	手拭	1反ト1すじ	2分1朱	三月廿九日		下谷池ノ端仲町通り京屋源七 唐物店江	京屋源七	
126	大石筆孔子椽	1幅	3両2分外1分 極札ノ禮	四月一日 古筆先生久平セ話		唐物店江		
127	台附鏡	1面	2両3分		横浜和泉屋重兵衛セわイキリス五十壺番ヨリ取(カ)	唐物店江		
128	片面モヘル		8両1分	四月一日		唐物店江		
129	両面モヘル	2枚	7両1分	四月一日		唐物店江		
130	菓子	1本	15匁	四月一日		唐物店江		
131	小紋繕組	4反	1反1両2分ツ、			唐物店江		
132	拝領刀ト附置候下緒	1口			万藤へ預ケ置候品	万藤へ預ケ置候品	万屋(銀座三丁目)	
133	鉄地鶴模様鞆	1ツ			万藤へ預ケ置候品	万藤へ預ケ置候品	万屋	

※塗りつぶしは抹消を示す

表4 刀一覽 (「東京行手控」1より作成 網掛けは抹消を示す)

	注文内容	月日	注文先	代	備考
1	歳旦模様大小仕立替	1月23日, 小村氏便ニ送	万屋藤兵衛注文	2両2分	是迄之刀之方, 勝家ノ身除キ在銘, 左ノ弘行ノ身入候事, 是迄信秀平常晴四分一半太刀拵刀ノ身, 同断脇差之方, 康春ノ身除キ無銘, 大和ノ国包真ノ身入候事, 是迄虎揃大小脇差ノ身, 外海老ニ柑子模様見当候ニ付代沓印 右小道具類是迄之品ニ而仕立替可申事, 尤大小共目貫并(抹消)「刀之方小柄算は品ニ寄取替可申事」脇差之方いひノ目貫万藤求付ル
2	拝領刀柄糸巻替并脇差新規仕立	1月23日, 小村氏便ニ送	万屋藤兵衛注文	3両2分(鐔代): 万藤より 6両(身ノ代): 万藤より -(サメ代)	右脇差(抹消)「在合備前盛光ノ身ニ而」万藤方ニ而スリ上ヶ身求メ入ニ事, 小道具求置之品持参, 尤鯨鏝新規求ル事
3	農業揃大小仕立替		万屋藤兵衛注文		是迄之刀ノ方, 濃州兼宿ノ在銘身除キ, (抹消)「在名」濃州長基ノ身入ル事, 是迄虎揃刀ノ身, 同断脇差ノ方在来備前盛光(抹消)「若州冬広ノ身除キ, 新規刀身ニ相応之品入可申事」
4	虎揃大小仕立替		万屋藤兵衛注文		是迄之刀ノ方, 濃州長基ノ身除キ, 備前之勝家身(抹消)「新規小道具相応之身」入レ可申事, 同断脇差ノ方大和包真ノ身除キ, (抹消)「若州冬広ノ身入可」康春ノ身申事, 是迄(抹消)「農業揃」サイタニ拵脇差ノ身, 刀ノ方サメ是迄左ノ弘行ニ付居候品ニ而, 脇さしサメ是迄之品ニ而
5	近江守藤原忠吉(抹消)「備前長船天正祐定刀新規仕立」半太刀拵ニ可致事 *右は, 身ガラミ有之候由ニ付見合		万屋藤兵衛注文	百拾ヌ両がへ	(抹消)「替鞆沓本付可申事」鯨ハ万藤ヨリ新規代四両式分(抹消)「是迄虎揃刀ノサメニ而」縁頭鞘金物万藤ヨリ代九印目貫(抹消)「タバ子キク代」金無垢三ツ桐代
6	備前義景刀新規仕立	1月23日, 小村氏便ニ送	万屋藤兵衛注文		縁頭(抹消)「左ノ広行ニ是迄附置候品にて又は上田候より被下如竹作, 縁頭外小道具は是迄左ノ広行ニ附置候品ニ而仕立可申事」如竹目貫松魚時鳥柄糸白拝領物永ニ是迄付居候品用ル, 鐔サメ(抹消)「代沓両式分」是迄虎揃刀ノサメにて
7	相州広光刀ノ身新規仕立	1月23日, 小村氏便ニ送	万屋藤兵衛注文	-(縁頭四分一) 1両2分(サメ代)	身研直シ龜半立刀拵, 道具類一式新規求メ可申事
8	左ノ広行ノ刀身沓本	1月23日, 小村氏便ニ送			歳旦拵刀ノ身ニ可致分
9	備前盛光脇差ノ身, 白鞘沓本	1月23日, 小村氏便ニ送			(抹消)「拝領刀」農業揃脇差ノ方身ニ可致分
10	宇多国宗短刀, 新規仕立之事	1月23日, 小村氏便ニ送			四分一ハミタシ拵ル
11	地鉄ニ而金覆輪七度鉄物一通				安行江注文直段問合可申事
12	地鉄ニ而半太刀拵金具一通 刀ノ分計リ				安行江注文直段問合可申事
13	差抜大小見当り之節三通リ計求メ可申事			沓通り金フハヨリ マハ位マテ	
14	短刀三本計リ相求メ可申事				内沓本五一部分被頼
15	南記(ママ)重国刀沓腰				
16	村治隠(抹消)「居」宅ヨリ(抹消)「月」時鳥松魚ノ目貫沓組			代五印	
17	雲龍ノ(抹消)「彫リ」縁頭短刀沓本			代拾〇	
18	肥後造リ刀沓本			代拾式〇	
19				サメ代沓両式分	
20	茶糸巻短刀沓本			代6両3分	此分小治郎
21	鉄金具短刀沓本			代4両2分	此分士郎
22	山脇差沓本			代2両	
23	濃州兼宿 信秀平常指				縁頭是迄信秀平常サシ, 四分一半太刀拵刀ノ道具ニ而
24	栗原謙司信秀 士郎				縁頭鐔若芝, 鞘鉄金色絵雲(カ)

表5 土産物の一覧（「東京行手控」2所収「帰宅之節土産配 軒別」より作成 網掛けは抹消を示す）

	品名	数量	買上店舗	配り先		代	備考（代金の表記は符牒）
1	松魚節(中七本入)	1袋	イ伊勢屋	清須様			
	煎茶(小半斤入)	1箱		清須様			
2	松魚節(中拾本入)	1袋	イ伊勢屋	御馬出様			
	煎茶(小半斤入)	1箱		御馬出様			
3	松魚節(中拾本入)	1袋	イ伊勢屋	高田鈴木氏			信秀酉年出府帰りの節土産代メシ拾分計りの品遣ス
	煎茶(小半斤入)	1箱		高田鈴木氏			
	国分刻煙草	1箱		高田鈴木氏			但し有合用ル事
	煙草入	1ツ	南伝馬町 式丁目ひし 屋伊兵衛	高田鈴木氏	御隠居	1分2朱	
4	松魚節(小七本入)	1袋	イ伊勢屋	普願寺			
	国分刻煙草	1箱		普願寺			有合用事
	風呂敷	1ツ		普願寺			
	半衿	1ツ		普願寺			
	白緋合セ羅紗巾着	1ツ		普願寺		銀八拾	但ふしつそめ縫（抹消）「紋白羅紗二而八ツ藤（カ）」 信秀酉年出府帰りの節土産代メサ拾ノヌ八計りの品遣ス
5	風呂敷(大)	2ツ		円成寺			
	半衿	1ツ		円成寺			
	髪かけ	1ツ		円成寺			
							信秀酉年出府帰りの節土産代メシ拾八計りの品遣ス
6	煎茶(小半斤入)	1箱		駒沢龍右衛門殿			
	半衿	1ツ		駒沢龍右衛門殿			
	髪かけ	2ツ		駒沢龍右衛門殿			
7	台重(黄アメ紙)	1ツ		小林経蔵		9匁	
	盃(箱入)	2ツ		小林経蔵		1分3匁3分ノ口	信秀酉年出府帰りの節土産代（抹消）「シ△」
8	サツマカスリ	1反		田中五八郎		179匁	品名「袴地」を抹消
	小紋繕紹復	1反		田中五八郎		金二而一兩2分	品名「玉川縮」を抹消
	男きせる	1本		田中五八郎	五一郎方		
	蒔絵櫛	1枚		田中五八郎	お袖方	42匁	
	蒔絵櫛	1枚		田中五八郎	おみつ方	42匁	
	白(抹消)「緋」羅紗巾着	1ツ		田中五八郎	刀之助方	銀二而八拾	
9	煎茶(小半斤入)	1箱		田中半左衛門			信秀酉年出府帰りの節メフ百マ拾八〇八計りの品遣ス
	半えり			田中半左衛門	おりつ方		品名「女下駄壺足」を抹消
	風呂敷(大にしき絵之内)	1ツ		田中半左衛門			
	雪駄	1足		田中半左衛門	央太郎方	16匁	
	緋羅紗巾着	1ツ		田中半左衛門	おあや方	銀二而フ拾フ〇八	品名「子供袖なし羽織壺ツ」を抹消 信秀酉年出府帰りの節メ代サ拾ヌ〇フ計りの品遣ス
10	風呂敷(大)	1ツ		田中和兵衛			
	半衿	1ツ		田中和兵衛			
	髪かけ	2筋		田中和兵衛			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ拾ヌ〇八計りの品遣ス
11	風呂敷(大)	1ツ		田中彦兵衛			
	半衿	1ツ		田中彦兵衛			
	寫田かけ	1筋		田中彦兵衛	おきし方		

	将基経本	1冊		田中彦兵衛	三助方			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代ノ拾ノ〇ハハ計リ之品遣ス
12	唐糸織	1反		田中録助				
	紙挟	1ツ		田中録助		銀ニ而八拾 ヌ〇マがへ		但書「小指(カ)判中物」を抹 消
	反物	1反		田中録助		61匁5分		
	男させる	1本		田中録助	礼助			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代マ拾〇八計リ之品遣ス
13	風呂敷(大)	2ツ		田中瀬兵衛				
	男させる	1本		田中瀬兵衛				
	黒八丈半衿	1ツ		田中瀬兵衛	おつね方			此分宅ニ而 同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代ノ拾マ〇ハ計リ之品遣ス
14	風呂敷(大)	2ツ		田中九兵衛				
	盃(箱入)	2ツ		田中九兵衛		1ツ1匁ノ口		
	にしき絵	3枚		田中九兵衛		1匁5分		同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代ノ拾〇ヌ計リ之品遣ス
15	風呂敷(大)	1ツ		田中磐太郎				
	半衿	1ツ		田中磐太郎	おうた方			
	盃(箱入)	1ツ		田中磐太郎		1匁ノ口		同断之節(信秀酉年出府帰り) メ代ト〇計リ之品遣ス
16	風呂敷(大)	2ツ		田中文平				
	半衿	1ツ		田中文平				
	盃(箱入)			田中文平		1匁ノ口		同断之節(信秀酉年出府帰り) メ代ト〇サ計リ之品遣ス
17	風呂敷(大)	2ツ		千野玄道				
	盃(箱入)	2ツ		千野玄道		1ツ1匁ノ口		同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代
18	風呂敷(大)	2ツ		兼田耕治郎				
	唐糸結城	1反		兼田耕治郎		57匁3分		品名「近藤ヨリ黒内朱吸物腕五 ツ 代式分式朱がへ」を抹消
	松魚節(七本入)	1袋		小布施土佐五郎				
	盃	2ツ		小布施土佐五郎		1ツ1匁ノ口		同断之節(信秀酉年出府帰り) 之節メ代マ〇サマ計リ之品遣 ス
19	風呂敷(大)	2ツ		小布施秀五郎				同断之節(信秀酉年出府帰り) 之節メ代シ〇マ計リ之品遣ス
20	風呂敷(大)	2ツ		西ノおはな				
	半衿	1ツ		西ノおはな				
	髪かけ	1筋		西ノおはな				同断之節(信秀酉年出府帰り) 之節メ代フ拾マ〇計リ之品遣 ス
21	風呂敷(大)	1ツ		大工藤吉				
	小倉帯地	1筋		大工藤吉	増吉方	32匁		(抹消)「此分牧新より■事」
	半衿	1ツ		大工藤吉	同人(増吉) 家内			
	鼠(抹消)「緋」 合セ羅紗巾着	1ツ		大工藤吉	小兒	銀ニ而フ拾 フ〇八		同断之節(信秀酉年出府帰り) 之節メ代サ〇サ計リ之品遣ス
22	風呂敷(中)	2ツ		西ノ 文兵衛				

23	風呂敷(中)	2ツ		上ノ 大乘坊			同断之節(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ○ヌハ計り之品遣ス
24	風呂敷(中)	2ツ		下ノ おせい			同断之節(信秀酉年出府帰り)之節メ代マ○計り之品遣ス
25	風呂敷(中)	2ツ		柄澤健治			同断之節(信秀酉年出府帰り)之節メ代マ○マ計り之品遣ス
26	風呂敷(中)	2ツ		上町 五三郎			同断之節(信秀酉年出府帰り)之節メ代フ○フ計り之品遣ス
27	風呂敷(中)	2ツ		おふし			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ヌ○ヌ計り之品遣ス
	にしき絵カ			おふし			
28	風呂敷(中)	2ツ		平兵衛			
29	徳利カ台重			新光楼 武兵衛			
	盃(箱入)	2ツ		新光楼 武兵衛		1ツ1匁3分ノ口	
30	風呂敷(中)	2ツ		中町 忠次郎			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ヌ拾ト○イ計り之品遣ス
	盃(箱入)	2ツ		中町 忠次郎		1ツ1匁ノ口	
	髪掛	1すし		中町 忠次郎		8匁	
31	風呂敷(大)	2ツ		清水為助			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ヌ拾ト○イ計り之品遣ス
	半衿	1ツ		清水為助			
	緋羅紗巾着	1ツ		清水為助		金ニ而1分1朱ト3匁	
	盃(箱入)	2ツ		清水為助		1ツ1匁8分ノ口	
	にしき絵	3枚		清水為助		1匁5分	
32	風呂敷(中)	2ツ		中町 平八			
33	風呂敷(中)	2ツ		中町 金箱金治			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ拾ノ○ヌ計り之品遣ス
34	風呂敷(中)	2ツ		中町 栄助			
35	雪踏	1足		横町 富澤新作		26匁5分かへ	同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ○ヌ計り之品遣ス
	松魚節(中七本入)			横町 富澤新作			
	徳利(箱入)	2本					
	盃(箱入)	2ツ					
36	風呂敷(中)	2ツ		横町 佐右衛門			
37	風呂敷(中)	2ツ		北原 民左衛門			
38	風呂敷(中)	2ツ		坂田 吉越新吉			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代サ○ノ計り之品遣ス
39	風呂敷(中)	2ツ		久七			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ○ヌ計り之品遣ス
40	風呂敷(中)	2ツ		村石 山岸又治郎			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代フ○イ計り之品遣ス
41	風呂敷(中)	2ツ		村石 竹前儀兵衛			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代シ△計り之品遣ス
42	風呂敷(中)	2ツ		村石 又吉			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代シ△計り之品遣ス
43	風呂敷(中)	2ツ		八丁 清之丞			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ○マフ計り之品遣ス
44	風呂敷(中)	2ツ		八丁 安右衛門			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代シ△計り之品遣ス
45	風呂敷(中)	2ツ		仁礼 幸右衛門			同断(信秀酉年出府帰り)之節メ代ノ拾ヌヌ計り之品遣ス
46	風呂敷(中)	2ツ		仁礼 伝右衛門			此者儀当時不埒之儀之出入留メニ付遣ニ不及
47	風呂敷(中)	2ツ		九反田 与蔵			同断(信秀酉年出府帰り)之節メノ○イ計り之品遣ス

48	風呂敷(中)	2ツ		五余 藻一郎			同断(信秀酉年出府帰り)之節 代メハ○イ計り之品遣ス
49	風呂敷(中)	2ツ		澤之都			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代ニ○フハ計り之品遣ス
50	風呂敷(中)	2ツ		小寫 植木新兵衛			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代イ○フハ計り之品遣ス
51	風呂敷(中)	2ツ		綿内 北村文蔵			
52	風呂敷(中)	2ツ		綿内 佐五兵衛			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代
53	風呂敷(中)	2ツ		綿内 金七			
54	盃(箱入)	2ツ				1ツ1匁之口	
55	-			綿内 彦三郎			*品名記載なし 此者儀此度 相頼連候ニ付、土産別段不遣 候而宜敷哉
56	風呂敷(中)	2ツ		山新田 丈五郎			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代シ△計り之品遣ス
57	風呂敷(大)	2ツ		向小寫 金右衛門			同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代サヌハ計り之品遣ス
58	三盆砂糖(小重箱共)	1重		片塩村 喜代太郎			
	盃(箱入)	2ツ		片塩村 喜代太郎		1ツ1匁8分之口	
							同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代ハ○ハ計り之品遣ス
59	風呂敷(中)	2ツ		湯田中 五郎治			
	盃(箱入)	1ツ		湯田中 五郎治			
							同断(信秀酉年出府帰り)之節 メ代イ○計り之品遣ス
60	唐棧縞	1反		手代 幸蔵		61匁5分	
61	唐棧縞	1反		手代 源右衛門		61匁	
62	-			謙八			*品名記載なし
63	小倉帯地	1筋		庄助		16匁	品名「きせる壺本」を抹消
64	小倉帯地(中)	1筋		儀七		15匁3分	品名「きせる壺本」を抹消
65	小倉帯地(中)	1筋		忠作		16匁5分	品名「矢立壺挟カ」を抹消
66	木綿絞	1反		定雇おきみ			
67	手拭	1反					
68	風呂敷(中)	2ツ		高井の定雇おはつ			
	手拭	2筋		高井の定雇おはつ			
69	風呂敷(大)	2ツ		越後高田おちか			
	手拭	2筋		越後高田おちか			
70	風呂敷(大)	1ツ		おとき			
	手拭	1筋		おとき			
71	小倉帯	1筋		台所頭 金助		30匁	「此分牧新」とあり
	手拭	1筋		台所頭 金助			
72	風呂敷(中)	2ツ		作頭 定八			
	手拭	1筋		作頭 定八			
73	風呂敷(中)	2ツ		前裁方 忠吉			
74	風呂敷(中)	2ツ		小用方 七蔵			
	手拭	1筋		小用方 七蔵			
75	風呂敷(小)	1ツ		茶之間頭女 よね			
	手拭	1筋		茶之間頭女 よね			
76	手拭	1筋		茶之間 女ども			
	みとり香	1本		茶之間 女ども			
	髪かけ	5筋		茶之間 女ども			
77	手拭	2筋宛		小者(徳平・辰平)			
78	手拭	1筋宛		並家来共一同			

*塗りつぶしは抹消を示す

おわりに

本稿では、田中本家の創業から最盛期、大正時代までを各時代の当主を追いながら振り返った上で、江戸・東京との関係についてとくに出府中の日記を検討した。江戸時代から現代まで続いている旧家の中でも、モノ資料と関連する史料が良好な状態で保存されている例はそれほど多くはない。本稿を含め、今回の共同研究では、これまであまり分析の対象となつてこなかった田中本家の消費行動の一端を解明することができた。明治・大正期に関する研究成果については、本研究報告の満園論文、長沢論文を参照されたい。

註

- (1)——本章の記述は、基本的に田中本家博物館編『豪商の館 田中本家』(田中本家博物館, 1994年)に拠る。
(2)——『家訓家定書』((財)田中本家博物館, 1996年)として翻刻されている。
(3)——田中本家博物館蔵。
(4)——「松代、須坂、中野騒擾風説聞書」(田中本家博物館蔵)。
(5)——「永代日記」(前掲『田中家の古文書』所収, 22～23頁)。
(6)——赤松聡子「信州須坂藩田中家の江戸町屋敷経営」『学習院史学』41, 2003年。
(7)——仲田定之助『下町っ子』(新文明社, 1964年)。
(8)——明治4年「年々記置」の記載「手代喜助」による(前掲『田中家の古文書』, 146頁)。
(9)——田中本家文書交通1-31-1・2。
(10)——岩淵「江戸城警衛と都市」『日本史研究』583, 2011年。
(11)——慶応3年(1866)の『大平武鑑』(国立国会図書館蔵)には、「御刀脇差目利所」として本阿弥家12家が書き上げられており、居所が浅草馬道となっているものの、太郎左衛門が一致する。表2では住吉町に仮住居となっており、典拠した可能性が高い、このほか、多くは下谷に居住していたが代替わりのためか、名前が一致しなかった。平十郎については、『日本大百科全書(ニッポニカ)』(小学館, 1994年)による。

田中和仁(田中本家博物館館長, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
岩淵令治(学習院女子大学国際文化交流学部, 国立歴史民俗博物館客員教員)
(2014年12月1日受付, 2015年3月19日審査終了)